

現在の中央省庁の体制は2001 (H13)年1月6日に発足し、国土交通省もその日に誕生しています。横断的な組織として新設された総合政策局は、旧建設省・旧運輸省という2大勢力がしのぎを削る主戦場で、「省内融和」を掲げつつも、文化の違いや政策実現に向けたアプローチの違いから生まれる衝突はやはり必然的に発生します。相対的に小さな旧北海道開発庁出身の自分は、そんな総合政策局の某課に課長補佐職として属し、言い難い緊張感を感じながら生きにくい日々を送っていました。その新国土交通省において、各局・各課の政策を公式な場でぶつけあう最初の機会が、次年度予算要求に向けた「国土交通省重点施策」という政策集の編集です。この取りまとめも総合政策局が担当していたのですが、この時に北海道局から登録された耳慣れない施策が、他でもない「シーニックバイウェイ北海道(以下、SBW)」でした。本号の対談にも登場されている和泉さんが北海道局地政課の開発専門官という立場で主導したもので、この言葉を眺めながら、ともすれば埋没しかねない北海道局からこうした意欲的な独自施策が打ち出されたことを、とても嬉しく、また誇らしく感じたことを覚えています。

特殊な環境と空気感の中で出会ったSBWは、こうして自分の中で勝手に応援する存在となりました。そしてこの「勝手に応援」マインドこそが、後の「街道唱歌」制作の原点となります。

私事ですが、自分は浪人、留年、休学、修士進学と、凶らずも退学以外を軒並み経験しており、長いバブル期を全て学生という立場で送りながら、しがたないギタリストとして音楽や演劇等に携わっていました。当時の好景気はビジネスシーンにとどまることなく、音楽シーンでは演奏の仕事が数多くあり、演劇シーンも80年代半ばの小劇場ブームとも



シーニックバイウェイ北海道フォーラム2007の案内チラシ

相俟って活況で、自分達が旗揚げした劇団はJR琴似駅裏にあった石狩軟石造りの倉庫を拠点に活動を展開していました。

しかしJR琴似駅周辺も徐々に再開発の機運が高まり、タワーマンションや商業ビルの計画が具体化していく中で、拠点であった倉庫も解体という運命に。その際に繰り返した議論の末、同じ場所で劇場再建を目指すこととし、活動母体となるNPO法人を発足させました。劇場は語るも涙という紆余曲折を経て何とか2006(H18)年に再建に至っています。そして再建翌年の2007(H19)年6月にこの劇場を使って開催してくれたのが、シーニックバイウェイ北海道推進協議会主催の「フォーラム2007」というイベントでした。

上で劇場再建の経緯に触れたのには理由があり、偶然ながら同時期の立ち上がり、多くの方々が関わりながら輪が広がっていく過程、同居する途轍もない苦勞、そしてスタッフの前向きな熱意等々、当時の自分の中でSBWと劇場再建〜経営が重なって見えていたからに他なりません。フォーラムの事前打合せで懇親会における賑やかな演奏を依頼された際に、あの時の「勝手に応援」マインドが頭をもたげ、劇場を使って下さった事に対する感謝、そ

寄稿

シーニックバイウェイ北海道

「街道唱歌」のはじまり

「街道唱歌」作詞・作曲 橋本幸氏
(前国土交通省北海道局長)



SBWフォーラム2007の懇親会の様子(2007年6月2日)

して同志としての応援を兼ねた何かを形にしたいという想いで、ルート的情景を歌い繋ぐ曲の制作を、誰に頼まれたわけでもなく勝手に始めたのでした。

曲調はドライブソングとして使っていただけるよう、やや速めの4ビートのジャズに。

一方歌詞は、当時で既に6ルートもあったことから「♪汽笛一声新橋を〜」でお馴染みの名曲「鉄道唱歌」がヒントとなりました。あの曲が沿線の駅名を連ねて歌っているように、ルートに沿線の市町村や景観を歌い繋いで行くと楽しそうです。勿論、単にそれらを羅列しても歌詞にならないので、韻を踏んだり各番の構成を揃えたりしながら何とか完成し、懇親会の場で歌わせていただきました。有難いことに優しいルートの皆さん達が温かく受け入れて下さり、この歌の「非公式テーマソング」としての人生が始まりました。

想定外だったのはその後ルート数が急速に増加していったことで、勝手に作ったために勝手に締まっていた自分の首ですが、ルートの拡大に必死に追随させ、12番=札幌シーニックバイウェイ藻岩山

麓・定山溪ルートまでをCD化した2011年には、既に13分超という長尺ソングになっていました。

時はそこから更に10年を刻んで2022(R4)年。SBWが20年を迎えるのを前に、所謂「記念事業」として、更なる指定分の追加を含めた街道唱歌のリニューアルのお話をいただきました。自分が入省から退任までの約32年間もどうか演奏活動は続けており、幸いなことに今や道内随一のミュージシャン達が支えています。これほど良いタイミングもなく、彼らと札幌南区の芸森スタジオに入り、レコーディングを行いました。

通常このようなレコーディングでは、一旦録音を完了した後に、音の強弱、残響、音質といった様々なものを電子的に調整する「エフェクト」と呼ばれる工程を必ず行うのですが、フツーじゃないことに挑むのもSBW。メンバーの生の音の素晴らしさをそのまま聴いていただきたく、敢えてこれらを一切施さない「No Effect」で仕上げました。

他方、これを機会に(一社)シーニックバイウェイ支援センターの皆さんは、各ルートの歌詞とは別



芸森スタジオでの収録の様子(2023年1月8日)

に、包括的に全体を歌う通称「ゼロ番」の歌詞制作に着手してくれました。自分にとっても初めてとなる他者の手による作詞です。みんなで検討を重ねていただき、素晴らしい「ゼロ番」の歌詞が完成しました。

構成は、ゼロ番から始まり、間奏を挟みつつ計15ルートを歌い繋いで最後に再びゼロ番。作業の最終章として、件の劇場に支援センターや開発局担当者に集まっていただき、最後のゼロ番の手拍子と「北海道!」という声をお願いしました。

振り返れば2007年当時は、伴奏はベース、ギター、ピアノ...と一人で演奏しながらの多重録音作業で、歌もボーカリストと2人だけでこの劇場で録ったもの。

あれから約20年。素晴らしい演奏家達が一緒に音を作ってくれ、この劇場で多くの関係者の皆様のご協力で完成する不思議な巡りあわせに、深い感慨を禁じ得ません。



「ゼロ番」制作のための打合せの様子(2024年7月24日)

「街道唱歌」は(一社)シーニックバイウェイ支援センターのHPで公開中!
<https://www.scenicbyway.jp/songs/>

